

# 【資料】 垣内松三宛て石森延男書簡

—— 国定国語教科書編纂史資料 ——

## 【序】

本稿で翻刻・紹介する資料は、一九四七（昭和二十二）年度から使用された国定第六期国語教科書（通称、みんないいこ読本）編集責任者である文部省図書局図書監修官・石森延男が、恩師である国語教育学者・垣内松三に宛てて綴った書簡三通である。

## 【翻刻】

（書簡A一枚目）

垣内先生

昭和廿一年八月十日

石森延男 朝

周囲の混迷の中にあつて  
一つの純粹性を求めて — あゝ  
すみきった独樂の鳴りのようにな  
りたい。さうしてこの時代を救ふべき  
いや光明を与へるべき  
国語読本を編纂しあげたいの  
です。子どもたちのために  
生命を捧げたい。私にとつては  
今こそ聖戦そのものです。  
「生きていたい。あと二ヶ年の

命を与へたまへ。」

この十月から使用すべき読本  
八冊を現在編纂（すべて新教材）

（書簡A二枚目）

同時に本書四月より発行すべ  
き恒久本十六冊編纂、手品師  
にあらざれば不可能な程の  
この多量生産。しかし内容を  
質を高めたい。高めるといふよりは  
一大転換をした新キジユクを示し  
たい。

○

在来の読本はいはゆるよみ本でした。しかし  
これからは国語学習の相手にしたい  
と考へてゐます。ことにこどもの表現力  
の伴侶たらしめたいのです。子どもの  
仕事のよき相手とならしめたいのです。  
「生きたことば」「温いことば」父の  
如く母の如き愛情のこもった読本

安 直 哉

にしたいのです。読本は直ちに

(書簡A三枚目)

全国児童の琴線にふれ、あゝ  
何百万の子どものたくましく共鳴を  
ききたい。「日本文化」の誕生は  
このひびきから蘇生させたい。

○

先生、先生をかつて与へていた  
いた「文学の世界」「文学の種子」は  
今、まさに地上に蒔かれようとして  
ゐます。「一粒の麦死なずば」—  
この通りです。「文学形態」の諸  
相がいかにして新読本に登場  
していくか活目して御らん下さい。  
やりますよ 先生、御力ぞへ  
下さい。激励して下さい。

とりあへず、「こくご一、二、三、」を御  
覧に入れます。「四」は昨夜脱稿。

(書簡B)

あの夜ほんとうに心配いたしました。いつも大元気な  
御達者な先生であるだけにびっくりしました。其後  
いかゞでございましょうか。御見舞しなければなりません  
毎日朝早く出かけ一日会ぎや編纂事務で夜おそく  
なりすっきり疲労してしまいますので失礼ですがつい  
御見舞もできずにいます。

「こくご一」「こくご二」のゲラ刷をこらんになって

「おめでとう」と祝ってくださいました先生のおことばを  
私は忘れません。唯一人としてそんなことをいつてくれた  
人はこの国中にいないのですから。ただ傷を探そうと  
したり、白眼視したり、あたりまえのことにように思っ  
ている連中が多いのです。私は何もそんなことに腹立ては  
いませんが先生のように心から祝っていたごとく  
胸が痛むほど嬉しいのです。こんな時もし両親がいや  
片親でも生きていたら — としみじみ思うのです。  
「コースオプスタデー」の執筆で昼夜兼行です。  
幸い肉体がつづきます。この十日まで提出なのでむりを  
せざるを得ません。でも、先生がこの国語読本は「理  
念体系をなしたものである」と太鼓ばんを捺された  
ので実に大きな元気がウツゼンとして湧き起こったので  
す。必ず完成させます。完成させずにはおきません。

垣内松三様

一月九日夜

石森延男

くれぐれも御大事に。

先生御編纂の

中学国文

教科書

見つきり

次第

飛田君

におことづけ

おたのみ申

します。  
たのしい明かるい  
おもしろい

教科書に

したいと念

じて

います。

こんな

ぶしつけな

書きぶりを

御許下さい。

紙がもふ一枚

になつた

ものですから。

(書簡C一枚目)

前略 まえことば

花咲きもはや散りはしめました

感慨深いものがありますか。

○ わけて今年の春は

さて、われわれの友人たちが新国語教科書の  
指導書を作っています。

「こくご一」指導書の巻頭に先生の御言葉  
がほしいのです。 題日付

『「こくご二」を通して、教師に与える書』  
といった観点で、十枚ほどのものを  
ぜひおたのみいたしたいということです。

「巻三」の巻頭は保科先生が書いて下さいます。  
二三日中にお願ひしたいのです。

○ それから先日おたのみいたしました「教育技術」  
誌の原稿十二三枚、これもとりいそぎ

御送り下さませ

(書簡C二枚目)

何かと先生の御力ぞえをいたゞかなくては  
なりません。

○ 別訂「四年用 第一学期分」ができた

した。

「梅一輪 いちりんづつの

あたたかさ。」

です。

○ 右よろしく。

修文館佐伯さんに

おことづけ

します

不

石森延男

垣内先生

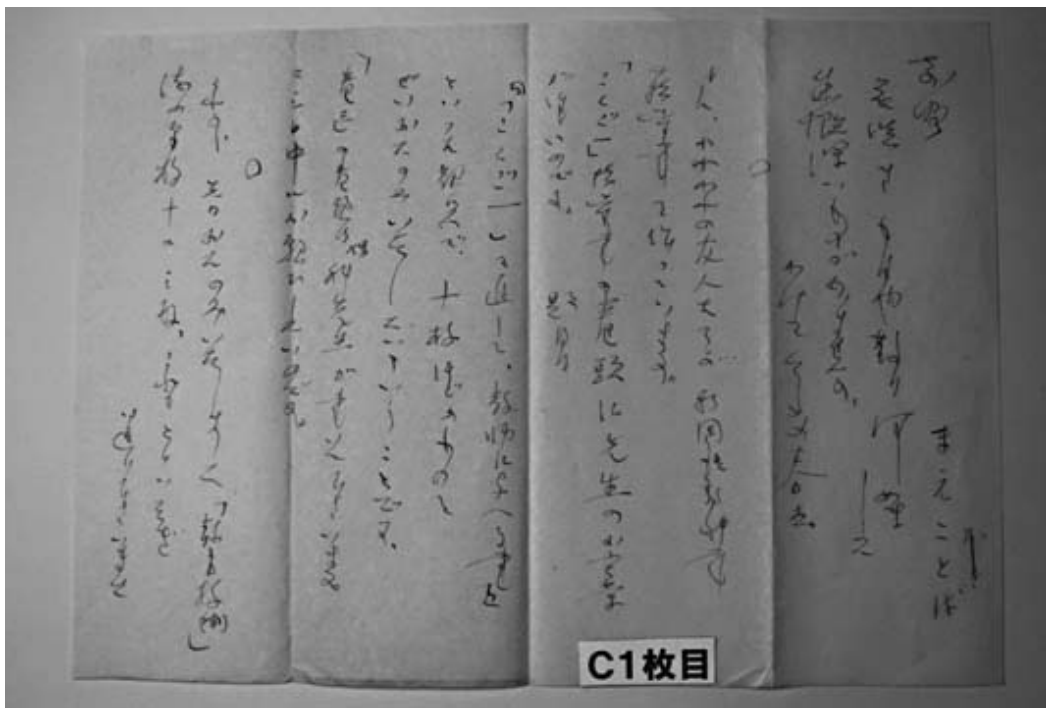
侍史

四月十六日

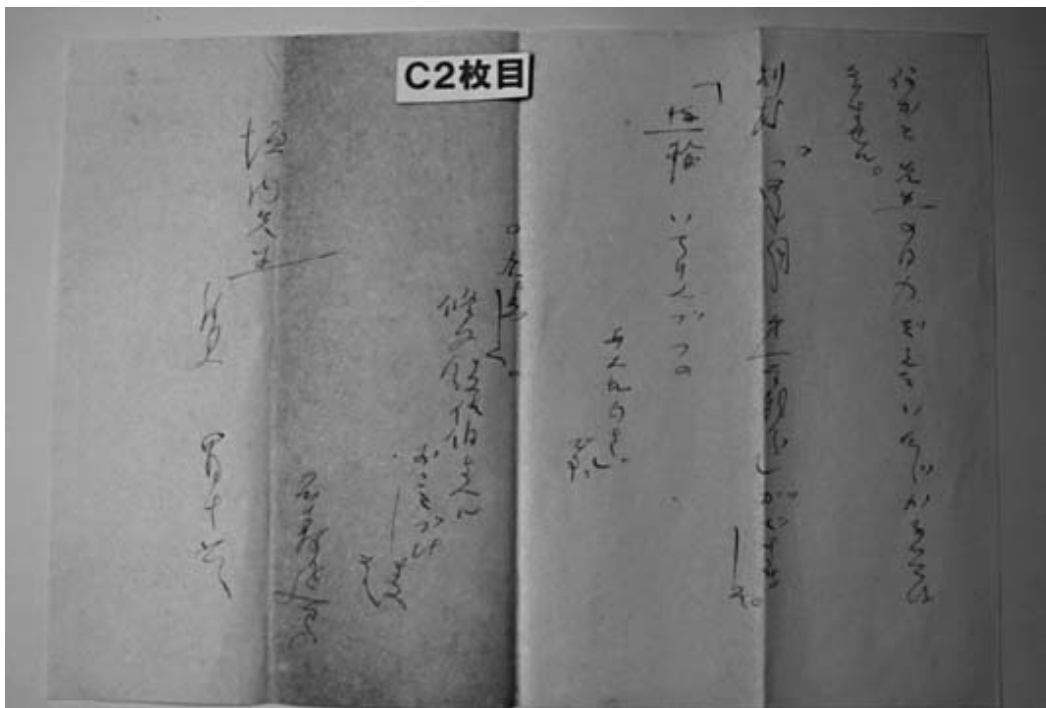




書簡C一枚目



書簡C二枚目





## 【解説】

書簡Aは、一九四六（昭和二十一年）八月十日に書かれたものである。同年十月から使用される暫定教科書と、翌年四月に使用が開始される国定第六期国語教科書の両方を作成している時期であった。国定第六期国語教科書（通称、みんないいこ読本）では、従来の「読本」から「国語学習」の教科書へと転換を図っていく構想が文面からも読み取れる。また、「『文学形態』の諸相がいかにして新読本に登場していくか活目して御らん下さい。」との本書簡の文言は実現し、みんないいこ読本においては、全教材が「詩情表現のむれ」「物語のむれ」「思索記録のむれ」「演劇一般のむれ」の四群に編成された。モウルトン (Moulton, R.G.) 著 *The Modern Study of Literature* の「第一篇 文学形態論」を淵源の一つに持つ形象理論が、戦後の国語教育に持続的に継承されたことを示唆する文書となっている。

書簡Bには「一月九日」の日付けがある。「『コースオブスタデー』の執筆で昼夜兼行」と書かれている。『学習指導要領国語科編（昭和二十二年度試案）』の執筆であり、一九四七（昭和二十二年）一月九日付けの書簡と思われる。CIE教科書・教育課程係官のケネス・ハークネスは、一九四六（昭和二十一年）十二月二十三日付けのカンファレンス・レポート「コース・オブ・スタデーの進行報告」の中で「国語・序論が提出された。単元に関する仕事はゆっくと進んでいる。1月20日までには終了するだろう。」<sup>①</sup>と楽観的な記録を残していた。しかし翌一九四七（昭和二十二年）一月十四日付けのカンファレンス・レポートでは、「国語：遅れている。ローマ字の指導資料は蓄積されているが、ローマ字を書くことを国語の習字に関連して教えるという国語科課程のために、計画は混乱している。」<sup>②</sup>と記された。石森はじめ日本側担当者の悪戦苦闘ぶりがしのばれる。

その一方、国語教科書は比較的順調に進んでいた。一九四六（昭和二十一年）年十二月二十四日付けのカンファレンス・レポートでは、次のよ

うに記録されている。

石森氏は、初等読本の第10巻で、第5学年の理解のレベルをこえているとみなされた物語に代わる物語を提出した。これらの物語は点検され、第10巻は校正刷りが許可された。

第9巻の校正刷りも許可された。<sup>③</sup>

石森にとって感慨深いクリスマス・イブになったことであろう。

このように、一九四六（昭和二十一年）年末には、みんないいこ読本の巻十まで出来上がっていた。年明けの本書簡で石森は左のように自らを鼓舞している。

先生がこの国語読本は「理念体系をなしたものである」と太鼓ばんを捺されたので実に大きな元気がウツゼンとして湧き起こったのです。必ず完成させます。完成させずにはおきません。

社交辞令を割り引いても、垣内松三が、石森読本を高く評価していたことがうかがえる。ちなみに「この国語読本」即ち国定第六期国語教科書は、一九四八（昭和二十三年）三月に編集が終えられた。

書簡Cには「四月十六日」の日付けがある。「われわれの友人たちが新国語教科書の指導書を作っています。」と書かれている。この「新国語教科書の指導書」として石森が指している書物が何なのかは不明である。石森延男と同じ垣内松三門下という点では、冲山光著『ユニット展開の新国語学習指導書 こくご一（一年用上）』（小学館）が挙げられる。同書には、「学習資料」として石森延男の文章（『綴方への道』からの転載）も登場している。しかし、同書は一九四七（昭和二十二年）四月十日に印刷され、同月二十日に発行されている。石森の言及しているのはこれとは別に計画されていた図書なのであろう。なお、冲山光著の同書の巻頭に垣内松三の文章は掲載されていない。

また、この書簡では雑誌『教育技術』への寄稿論文の催促をしているが、管見の限り、『教育技術』誌に垣内松三の論文が掲載されることはなかった。

以上が今回、資料として翻刻した書簡の概略である。

\*

渋谷孝は、石森延男を研究するにあたって、解明されなければならない問題を二点挙げている。本解説で論考するのは二点目として提示されている問題点である。渋谷は次のように指摘する。

石森延男について知って置くべき大事なことが二つほどある。第一に（中略）。第二に、石森延男は一九三九（昭和十四、四十二歳）年に文部省図書局図書監修官に任命されて、太平洋戦争中に当時の大日本帝国の「国民精神の涵養」という特定のイデオロギーを盛り込んだ教科書の編纂に当たったこと、その同一人が戦後の民主主義思想を盛り込んだ国定教科書の編纂に従事したことの問題である。すなわち同一人が編纂の当事者として、全く世界観の異なった国語科教科書を編集したことの問題である。これは本人の心情のありかと、他者の評価のくいちがいが起こりかねない問題になる。安易な決着をつけてはならないが、現代国語科教育史研究の大きな問題の一つである。<sup>(4)</sup>

渋谷の言わんとしたいところは十分に推察できる。軍国主義的・超国家主義的な国定国語教科書（通称、アサヒ読本）を、一九四〇年代初頭に作成した石森延男その人が、ほんの数年後の一九四〇年代後半には民主主義的な国定国語教科書（通称、みんないいこ読本）の作成に、すんなりと移行できた。この変わり身の速さへの疑義である。

渋谷は慎重に論証を進めているが、そこに見えてきたのは自ずと次のような結論である。

石森は、太平洋戦争を挟んだ一九四五年を境とする戦前と戦後の仕事について、つねに自分の仕事は間違っていないかったという、心情によって支えられている。歴史的根拠についての意識を欠落した観念的なロマンチズムと言えようか。（傍線引用者）<sup>(5)</sup>

まさにそうなのである。今回紹介した書簡Aには、「子どもたちのため

に生命を捧げたい。私にとつては今こそ聖戦そのものです。『生きていたい。あと二ヶ年の命を与へたまへ。』と記されている。石森延男にとつては、一九四五（昭和二十）年八月十五日以前も、一九四五（昭和二十）年八月十五日以降も、いずれの時期も「聖戦」に挑んでいるという意識で一貫していた。

石森が大連弥生高等女学校教諭であった一九三八（昭和十三）年に、満洲日日新聞社選歌・関東軍新聞班推薦『戦線の歌』という冊子が大連で発行された。そこには石森延男が作詞した歌詞が掲載されている。著作権等の関係で一部しか引用できないが、以下に記す。

#### 砲撃の歌

一

目標きめたら 逃がさぬぞ

こりゃ 逃がさぬぞ。

木端微塵に やつつける

こりゃ やつつける。

（二番から四番は省略）<sup>(6)</sup>

#### 突撃の歌

一、おい 突撃だ 突撃だ

兄弟いかうぜ

一歩もひくな

生きた弾だぞ

この五体。

（二番から三番は省略）<sup>(7)</sup>

#### 空軍の歌

（一番から三番は省略）

四



射撃・戦闘・爆撃だ

もしもやられたその時こそは

僚機さよなら

肉弾だ。(8)

肉弾攻撃を覚悟させ、断行させる極めて過激な戦闘思想が歌唱によって兵士に刷り込まれていく。この作詞者はとりもなおさず石森延男その人なのである。これと同一人の筆から『生きたことば』『温いことば』父の如く母の如き愛情のこもった読本にしたいのです。読本は直ちに全園児童の琴線にふれ、あゝ何百万の子どものたくましく共鳴をききたい。(『書簡Aより引用』と綴られる。やはり「観念的なロマンチズム」と評せざるを得ない。

しかし、このような、あっけらかんとした変わり身の速さを、石森個人の傾向として収束するのは適当ではない。終戦前後に広く一般に見られた日本人全体の姿であり、歴史の鏡越しに考察した結果見えてきた石森延男像は、当時の日本人の自画像と言ってもよいであろう。

ほんの一部の雲中白鶴のごとき人は自己矛盾に葛藤したかもしれない。しかしその一方、知識人をはじめ多くの国民は、深刻な自責をすることもなく、次の時代(昭和二十年代)に自らを適応させていったのである。加藤典洋は『敗戦後論』の中で次のように指摘する。

わたし達は、よく横暴な侵略者の専制下、じつと面従腹背の姿勢で屈辱を耐えしのぶ敗戦者たちの物語を見聞きするが、これらの敗戦者たちは、いくさに敗れたとはいえ、「理」は自分たちにある、と信じていられる分、まだまだ幸せな敗戦者たちなのである。ある場合、事態はさらにその先に進む。敗戦者たちは、もう胸の底でも自分の「義」を信じていることができない。かつて自分を動かした「理」または「義」がじつは唾棄すべきもの、非理であり不義であると、認めざるをえなくなり、自分をささえていた真理の体系が自分の中で、崩壊するのを、経験しなくてはならない。すると、その先彼は、どうい

う「生」を生きていくことになるのか。(9)

多くの日本人は、加藤の言うような「自分をささえていた真理の体系が自分の中で、崩壊する」ような絶望の淵まで沈潜深慮はしなかった。しかしそれをもって、七十年前の我々の思考を批判したとて、あまり生産的ではない。むしろ、今回取り上げた石森延男の事例を典型とするような、言わば、あっけらかんと豹変する、戦中戦後期の日本人の性格構造を組織的に解明することを筆者の今後の課題としたい。

ただし本稿では、石森延男という人物研究に議論を戻す。そして、筆者はむしろ、〈国民国家〉論から石森延男の仕事極めて興味深い事例に見定めている。

〈国民国家〉については木畑洋一の左記の定義に拠る。

国民国家(ネイション・ステイト)とは、国境線に区切られた一定の領域から成る、主権を備えた国家で、その中に住む人々(ネイション∥国民)が国民的一体性の意識(ナショナル・アイデンティティ∥国民的アイデンティティ)を共有している国家のことをいう。(9)

〈国民国家〉は個人の集まりではない。個人を遙かに超えた彼方にある、意思を持った運動体である。しかし〈国民国家〉が実在し続けるためには、その意思を実行する人間が必要となる。石森延男は、日本という〈国民国家〉に見出され、日本という〈国民国家〉の手足となって、〈国民国家〉存続のために動かされた。

石森延男には、戦前戦後を通して一貫して〈国民国家〉の保持の役割が与えられた。千変万化する国際関係の渦中において、日本という〈国民国家〉の持つ生存本能を、的確に現実化していった。この一点において、石森延男は極めて適当な「官吏」だったのである。

こうした〈国民国家〉論で一応の説明はつくが、それでも空想論だという不満は残るであろう。資料紹介解説の本稿ではこれ以上の論究は難しいが、一つ注目すべきは、渋谷孝が、昭和戦前期国語教科書史研究に切り込むための有効なキーワード(手がかり)を提供してくれたという

点である。それは「観念的なロマンチズム」だ。その一端は本稿でも  
 闡明できた。第三期から第六期の国定国語教科書に纏わりつくように漂っ  
 ていた「観念的なロマンチズム」の正体を徹底的に解明することが、  
 筆者の今後の課題である。

## 【注】

- (1) 小久保美子訳(二〇〇二)『GHQ/SCAP機密文書 CIEカンファ  
 レンス・リポートが語る改革の事実——戦後国語教育の原点——』東洋館出  
 版社、三九頁
- (2) 注1に同じ。四二頁
- (3) 注1に同じ。四一頁
- (4) 渋谷孝(一九九五)「石森延男に何を学ぶか」『月刊国語教育』一五卷五  
 号、東京法令出版、二二頁
- (5) 渋谷孝編集・解説(一九九二)『現代国語教育論集成 石森延男』明治図  
 書、四九二頁
- (6) 石森延男作歌・園山民平作曲(一九三八)『戦線の歌』大連・東亜印刷、  
 四頁
- (7) 注6に同じ。六頁
- (8) 注6に同じ。七頁
- (9) 加藤典洋(一九九七)『敗戦後論』講談社、一二頁
- (10) 木畑洋一(一九九四)『世界史の構造と国民国家』(歴史学研究会編『国民  
 国家を問う』青木書店、五頁)

## 【参考文献(注に記したものを除く。】

- 冲山光(一九四七)『ユニット展開の国語学習指導書 二〇〇一(一年用上)』  
 小学館
- 垣内松三(一九七七)『垣内松三著作集 第九卷』光村図書
- 渋谷孝(一九九六)「改訂石森延男年譜と新資料—現代国語科教育史論のために—」  
 『宮城教育大学紀要』三〇巻第一分冊、一八三—二〇二頁)
- 飛田多喜雄(一九八八)『続・国語教育方法論史』明治図書

※書簡の解説にあたっては、「SOHO吉田屋」(東京都八王子市)のご協力を得  
 ました。記して感謝いたします。ただし翻刻の責任はすべて安直哉にあります。  
 ※本研究はJSPS科研費26590232の助成を受けたものです。